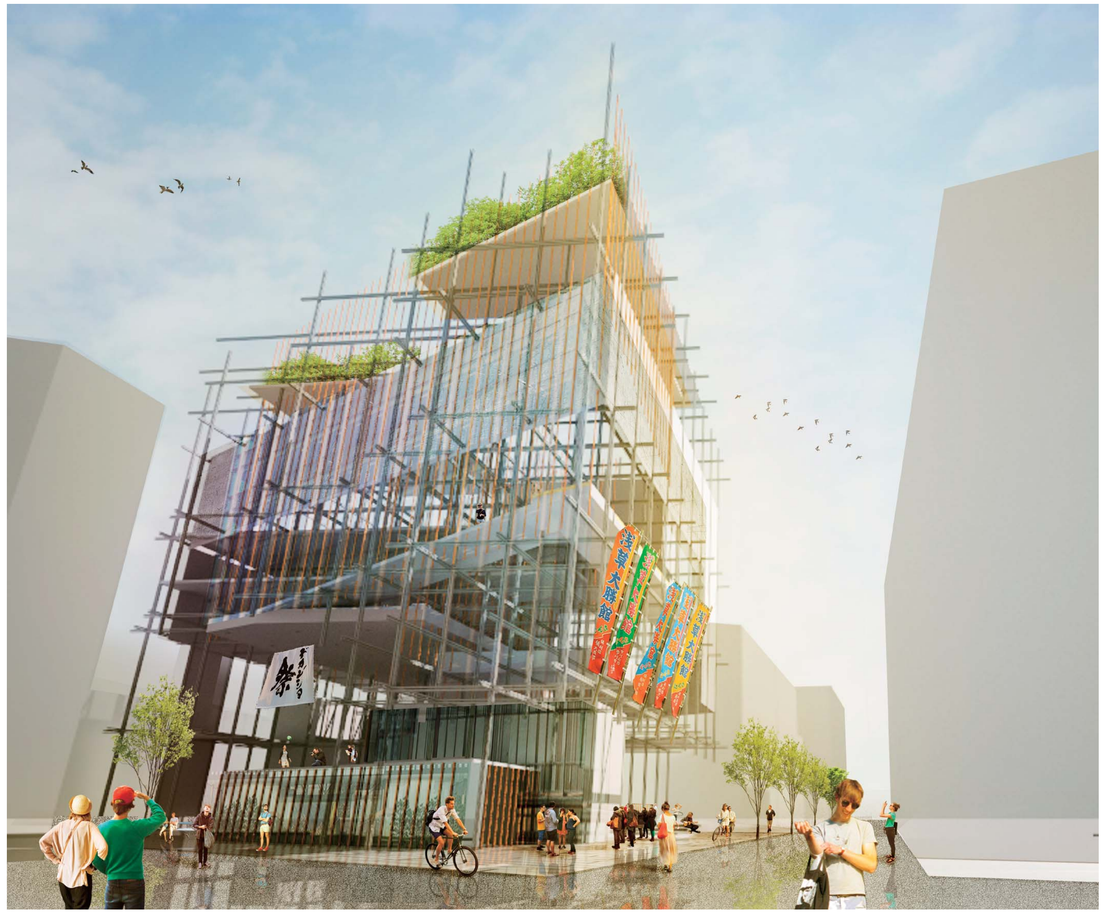


大きく開かれたピロティから祭り太鼓が辺り一帯に鳴り響き、人々を迎え入れる。

屋内広場には屋台が並び、大勢の人々で賑わう。

大きな吹き抜けが空間を繋ぐ。屋上広場では結婚式が行われ、浅草が祝祭の雰囲気に包まれる。

屋外テラスでは夜の浅草を眺めるために人々が集い、テーブルを囲む。

浅草に灯る賑わい

古来より浅草は寺町として、広範囲に人々の集える場が展開した。人々は新しいものを求め、路上を埋め尽くし、文化の結節点として栄えた。形骸化されつつあるこのまちに、賑わいの循環を与える新たな都市の骨格を提案する。人々の活動から形成される建築は、浅草に新たな文化的風景を創出する。

01. 文化がぶつかり合うまち「浅草」

かつて最先端の文化を発信してきた当時の浅草では、あらゆるヒト・モノ・コトが屋外に溢れ出し、賑わいを演出している様子を伺うことができる。そうした人々の活動がまちに還元されることで浅草という場所を形成してきた。

02. 観光地化により 切り離された地域社会

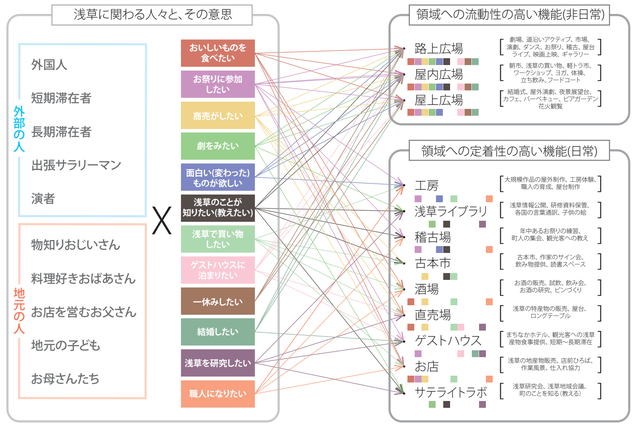
浅草寺や仲見世通りなど、強力な集客コンテンツを持つ環境に恵まれていた浅草は観光地化が勧められた。しかしパッケージ化されたまちでは、観光客たちは決まったルートを歩き、浅草のほんの一部しか知ることはない。また、直接の恩恵を受けない住民の支持を失い、地域社会とかけ離れたものになる危険性が存在する。

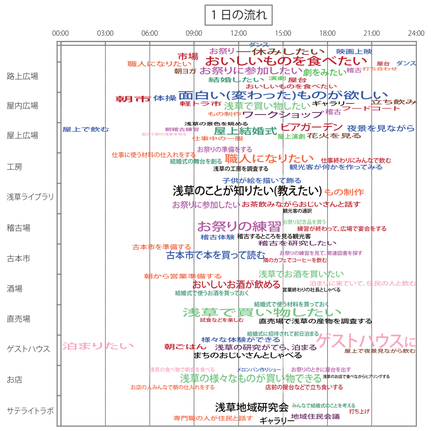
03. 賑わいの循環と行動領域の拡張

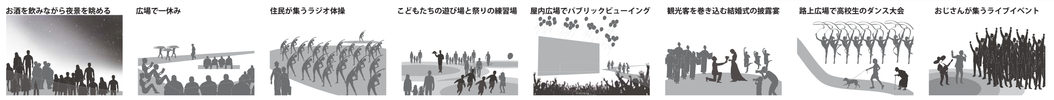
そうした浅草の課題点を解決するのは人の活動である。時間、季節を通して変化する人の活動を許容できる余白としての場所が、人々の行動領域を拡張させ、切り離された観光と地域のつながりの間を取り持つと考える。

04. 浅草に関わるすべての人によって生み出される空間

地元の人と外部の人を分けるのではなく、浅草に関わる人みんなが街をつくるプレーヤーであると考える。「お祭りに参加したい」「屋台を使ってものを売りたい」など、人々の自発的な意思から求められる機能を割り出すことで、時間や季節によって劇的に変化する空間が構成される。

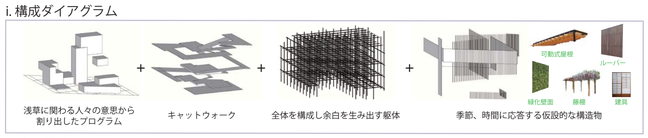






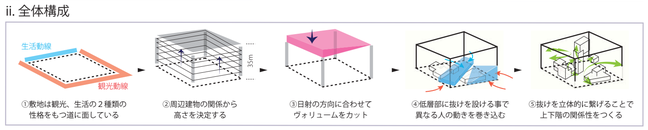
05. 人々の活動を許容する環境の骨格

i. 構成ダイアグラム



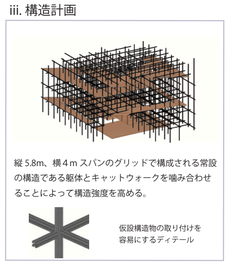
浅草に関わる人々の意思から割り出したプログラム + キャットウォーク + 全体を構成し余白を生み出す躯体 + 季節、時間に応答する仮設的な構造物

ii. 全体構成



①敷地は観光、生活の２種類の性格をもつ道に面している ② 周辺建物の関係から高さを決定する ③日射の方向に合わせてヴォリュームをカット ④低層部に抜けを設ける事で異なる人の動きを巻き込む ⑤抜けを立体的に繋げることで上下階の関係性をつくる

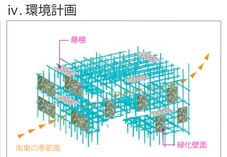
iii. 構造計画



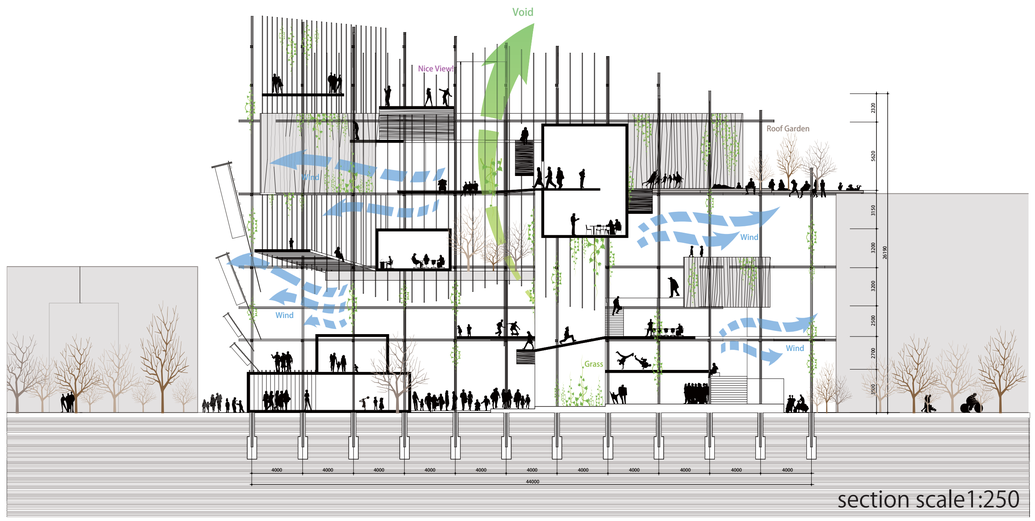
縦 5.8m、横４m スパンのグリッドで構成される常設の構造である躯体とキャットウォークを噛み合わせることによって構造強度を高める。

仮設構造物の取り付けを容易にするディテール

iv. 環境計画



季節ごとに異なる風の通り道を設け、環境の変化に対応する。また、躯体の構造は藤棚や緑化壁面など、季節に応答する仮設的な構造物などの取り付けをを容易にする働きをもつ。



section scale1:250

周辺街路から浅草の賑わいを建築内に引き込み、街へと表出させる